

Funehiki High School News vol.91

◆ 企業説明会が行われました

1月23日、2年生を対象に企業説明会が行われました。たむら農業協同組合と藤倉航装株式会社、三春自動車工業株式会社、溝端紙工印刷株式会社東日本工場、社会福祉法人南東北福祉事業団総合南東北福祉センターの計5つの団体・企業が参加してくださいました。生徒は3つの団体・企業から企業概要や仕事内容、そして求められる人物像などについて話を聞き、今後の進路を決める上での参考にしていました。



○生徒の感想 2年2組 石井日香里さん

私は将来、サービス関係の仕事に就きたいと考えています。今回の説明会で、仕事の内容やどんな人がその仕事に向いているのか、それぞれの会社で大切にしていることは何かなど、多くの貴重な話を聞くことができました。

特に印象に残っているのは福祉関係の企業の方の話です。福祉の仕事内容について最初は漠然としていましたが、話を聞か中で、介護を必要とする人に応じて介護の仕方が細かく分かっていることを知り、とても驚きました。また、介護の仕事に就く方法には、専門学校へ通って知識を身につけてからとばかり思っていたのですが、高校卒業後すぐに就職し、仕事をしながら経験を積むことで資格を取る方法もあることを知りました。

業務内容が異なる企業の話や、サービス関係以外の仕事にも興味を持つきっかけにもなり、進路選択の幅が広がりました。企業説明会で聞いた話を今後の進路活動に生かして行きたいと思えます。

○生徒の感想 2年4組 吉田静香さん

3つの団体・企業のお話の中でも総合南東北福祉センターのお話がとても印象に残りました。総合南東北福祉センターでの仕事は、体が不自由な人、当たり前前の生活が困難な人や障がいを持った人たちのお世話です。そこで働いている看護師の方のお話が特に心に残っています。それは「体の不自由な人や当たり前前のことができない人を助けたいという気持ちがある人は、福祉や看護の世界に向いている」というお話です。私は将来看護師として働き、人の役に立ち、社会に貢献できるような人物になりたいです。その進路を実現するために私は、コミュニケーション能力を身に付けたいと思っています。勉強はもちろんですが、日々の努力を積み重ねていき、立派な看護師になれるよう頑張りたいと思います。



◆ 消防団講話

1月23日、3年生を対象に消防団講話が行われました。地域の消防団の方々により、消防団の意義と現状、活動内容などが、写真などを踏まえて紹介されました。火災だけでなく自然災害時の救助・救援活動における消防団の重要な役割についての話に、生徒たちは皆熱心に聞き入っていました。将来、「自分たちの地域は自分たちで守る」という精神の下、多くの卒業生の活躍を期待しています。



◆ 進路報告会

2月6日、3年生の代表生徒8人による進路報告会が行われました。3年生から、進路希望実現に至るまでの体験談が発表され、それぞれの苦労も踏まえ後輩へのアドバイスが贈られました。報告会后、1・2年生からは「将来に向けて、先輩方のように努力を積み重ねていきたい」「1回目の受験が不合格でも、気持ちを切り替えて次のチャンスに備える強さを持つ先輩方のようにになりたい」などの感想が聞かれました。メモをとりながら真剣に先輩の話や1・2年生の姿からは、これからの本格的な進路活動に向けての熱意が感じられました。



▲報告する佐藤輝太さん ▲進路報告をしてくれた先輩の皆さん



違う、それとも同じ？

Esther Kim
エステル・キムさん
(アメリカ合衆国
ニューヨーク州出身)

海	を	越	え	て
英	語			
	指	導	助	手
ペ	ン	リ	レ	ー
			No.	21

「あっ、日本人だ」。私が子どもたちに英語であいさつするとよくそう言われます。大人の人たちや若い方、年配の方も同じように、私が日本人だと勘違いします。しかし、ある意味で私がこの美しく豊かな歴史ある国に、縁があつて結び付いているのは確かなことです。

何十年前に、私の祖父は将来の自分のために13歳で日本にやって来ました。祖父は大阪で15年間暮らし、日本が本当に好きになり、自分を日本人と思ったほどでした。34歳で韓国に戻った時には母国語をすっかり忘れていました。アメリカで成長していた私は、子どもながらに祖父が日本人と会うたびに喜びにあふれ、明るい表情になっていたのを覚えています。それは、熱っぽく流ちょうに語り合う、いかにもうれしそうな祖父を見た唯一の時でした。そんな祖父は日本に対する愛情を表すために私に「東京」と名付けたと、中学生のころ、父が私に話してくれました。

私は小学5年生の時に初めて、鳥山明の漫画「ドラゴンボール」の英語版を読んだことを覚えています。それが私と兄、弟たちが漫画を好きになるきっかけでした。私は主に歴史や文学、芸術を学ぶことにいつも情熱を持っていました。子どもの時から生活のあらゆる面で「どのように」や「なぜ」など疑問に思った事があると、どうしても知りたいと思いました。それは、理性的にも情動的にも「偏った心」を持たないようにしたいとの強い願望によるものでした。ある人たちは、韓国系アメリカ人(あるいは韓国系ヨーロッパ人)として日本で差別を受けるかもしれないと警告してくれました。しかも私は欧米の文学と歴史だけでなく、日本と韓国の文学、歴史も学んでいたため、本当にそのようなことがあるかもしれないと不安や懸念の思いにさいなまれたとしても不思議ではありませんでした。しかし日本に来てから現在までの生活の中では、日本人の寛大さと好奇心、そして本当の日本文化を他の国の人たちに教えてあげようとする日本人の熱い心に触れ続けてきました。

世界は変化していて、私たちが「前に進む」ためには、国際化の意識が欠かせないことと思われます。そのような変化を私自身がどのように感じているのかまだよく分かりませんが、私に理解できることは、世界のどこへ行ってもそこには固有の課題があるということです。外見・文化・伝統・歴史などの違いが心の重圧になっても、胸の奥では同じ心臓が鼓動しています。私たちがどのような人になるのかを決めるのは「人種の違い」ではなく、自分が生活している地域社会に役立ち、たとえ自分の生き方や名前が残ることがなくても、前向きで建設的な生き方の足跡を残していくかどうかを自分で選択することなのだ気が付きました。

駅でおじいさんやおばあさん、子どもたちから気軽に話しかけられた時、私は自分が日本人であるように感じています。このことによって私は日本人の心を本当に理解することに一歩近づけていると信じています。そして、今生活している田村市の地域社会で、私はそのような印象を永く残せるようにと願っています。

